

研究課題	パブリック・ヒストリーの実践としての歴史学習論の構築―地域における関東大震災の記憶と記念事業を事例として		
氏名 日高智彦	所属 人文社会科学系・社会科教育学分野	職名 准教授	
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 本研究は、当初、千葉県船橋市・八千代市・習志野市においてフィールドワークを伴う資料収集を計画していたが、コロナ禍のため文献資料に基づく調査に切り替えざるを得なかった。その中において、これらの地域における関東大震災時の朝鮮人虐殺の歴史を、それがどのように明らかにされてきたか、これらがどう記念されてきたか、というプロセスを含めて調査した。その結果、海軍無線電信所船橋送信所の記念碑の碑文が、関東大震災時に朝鮮人に関する流言を発信したことを隠蔽すること、このことは打電記録からも明らかになっているにも関わらず、碑文は訂正されていないこと、それだけでなく、地域の児童・生徒にとっては学校の調べ学習の題材として扱われ続けており、「隠蔽」が学校における歴史教育によって再生産されていること、に着目した。また、八千代市の高津観音寺に1999年に慰霊碑が建てられた際、その碑文の文言をめぐって地域住民の間に意見のちがい一軍から「やらされた」ことを刻みたい人びとと、「やらされた」とはいえ地域住民が朝鮮人を殺害したという負の歴史を刻みたくない住民と一にも着目した。近年注目されつつあるメタヒストリー学習論を援用すれば、地域社会における負の歴史の記憶・記念の方針・志向が地域社会の構成員によって異なりせめぎあっているという事実は、過去に関する思考に終止しがちな歴史学習を、現在と未来の社会形成に関わる思考へ展開させる教材になりうると、仮説化できるからである。この仮説を、2022年度より実施される高校新設必修科目「歴史総合」の、大項目A「歴史の扉」（2）「歴史の特質と資料」の教材として、また、大項目D「グローバル化と私たち」（4）「現代的な諸課題の形成と展望」における探究学習の題材として、具体化した。この2単元は、従来の高校歴史教育において十分に実践されてきていなかった内容であり、これらの具体化には歴史教育改革に一石を投じる意味がある。これらを教員養成・教員研修の機会を含め、模擬授業という形で実践しつつ、その教材論としての効果を検証しながら、負の歴史を社会的に共有することを「学力」論として理論化していくことが、今後の課題である。			
【研究成果発表方法】 本研究の成果は、全国民主主義教育研究会第51回大会シンポジウム（2020年8月21日オンライン開催）における報告、および、島根大学公開ワークショップ「探究型授業の今後を展望する」（2021年3月22日オンライン開催）のコーディネートと総括コメントに活かすことができた。また、『民主主義教育』vol.21に執筆中である。			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。